

## ネパールでの新型コロナウイルス感染拡大の現状 その2

特定非営利活動法人 ミランクラブジャパン  
理事長 マナダール マダーブ ナラエン

ネパールでは新型コロナウイルス感染拡大が始まって以来、厳しいロックダウンを行ったり、緩めたりを繰り返してきた。全国一斉休校になった教育現場は混乱を極め、再開の見通しが示されるものの、延期々々で未だに予定が立っていない。8月17日から学校再開の話はあったが、それどころか15日間の再び厳しいロックダウンとなった。コロナに関しての対応は国の政策基準に準じて8月からは各郡の判断に任された。空路（チャーター便は除く）、長距離の陸路も閉鎖された。9月に行われるダサイン祭、ティハール祭の後に学校が再開されるのではないかとの話もある。コロナ感染拡大以降の祭りは地域を挙げてのものではなく、各家庭内で祝うものに留められている。



ロックダウン中にプロパンガスを運ぶ人

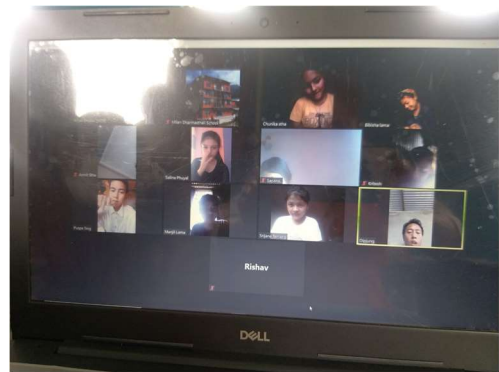
ロックダウンが緩まったタイミングで教育の遅れへの多少の工夫はあったものの現在ではストップしてしまっている。

ミランダールマスターリ学校では再開に向け人数分のフェイスシールド、消毒液を用意した。各人のマスクも義務付け、校門には手洗いのための水道も用意した。ソーシャルディスタンスのために教員室を広げ、今までの教室に加え、密集しないよう空いている部屋やホールも教室として使うようにした。図書室の整備も先生方全員で1ヶ月近くかけ行っている。

いろいろと準備はしたものの再開への期待は裏切られ続けている。



ミランダールマスターリ学校のフェイスシールド



オンライン授業

子供たちの勉強の遅れをどう取り戻すのか、学校のカリキュラムをどう調整していくのか、問題解決にはまだ多くの時間がかかりそうだ。教育省は今年度だけは教育のスリム化を図ってでも進級させる方針を示した。これからは休みを減らし授業時間、授業日数を増やす。教科によっては省略できる部分を省略する。やり残しがないように授業での無駄を省く。次の学年に問題を持ち越さないよう、やりきる等である。

自粛期間は本当の休みではないので精神的に辛いものがある。子供たちは友達にも会えないし学校へ行っているはずの毎日の過ごし方に不安を感じている。ロックダウンが緩められた時は、地域によ

っては3密を避け小さな集会を開き子供たちを元気付けている。

里子たちへの奨学金は定期的に支払われている。

ネパールでは日本と違い、学校には休校中の授業料は一切入ってこない。もともとネパールでの授業料集金は大変な仕事である。毎月、保護者が各々払えるタイミングで学校に現金を届けるので、担当者は毎日のように銀行へ行かなければならない。未払い家庭への連絡や訪問もしなければならない。何ヶ月も滞納する家庭も多く、卒業時には大きな問題になる。

私立学校では教職員の給料は支払われていない所が殆どで、ミランダルマスター学校は何とか工夫して払っている。このまま休みが長引けば払えなくなってくると思う。公立学校では75%支払われているとのことだ。

少しずつ改善してきた教育環境を経済疲弊で後退させないよう政府には頑張ってもらいたい。

ネパール政府の発表によると8月21日時点で、人口29,207,992人のネパールでのコロナ感染者数は30,483人、死者数は137人である。

幸い今のところ、ミランクラブの里子たちからの感染者はいない。しかし、インドに留学中の里子の一人が、寄宿舎で同室の学生がコロナに感染したことから、濃厚接触者ということで2週間隔離されたと報告があった。また、ミランクラブネパールの理事の一人は発熱し治らなかったため検査した結果、陽性と診断された。ネパールではまだPCR検査は自由に行えない。コロナ感染の疑いがあるとされた場合、検査費用は無料であるが、個人で検査を行う場合は一人当たり4,500ルピーかかる。この理事に先週電話で話をしたところ、現在自宅隔離中で回復しつつあるという。

政府は国が用意した病院の他、ホテルや休校中の公立学校の一部をコロナ患者隔離施設として利用している。



PCR 検査



街中の消毒

どこでも感染しうる状況は目に見えず身近に迫っている怖さがある。

だんだんとコロナへの対応もわかってきてはいるものの怖さには変わりはない。感染の拡がりて私たちの生活は変わり、様々なことを自粛せざるを得ませんが、どうぞ皆様が健康で過ごせますよう心から願っています。



ロックダウン中の街の風景